

教育目標		未来を元気に							
重点目標		(1)未来を元気に生き抜く力の育成 (2)「みんなが活き、活かされる」元気な未来をつくる力の育成							
主要施策	施策目標 基本施策	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価	
学校教育	知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成	「確かな学力」の育成 ①授業改善 ②誰一人取り残さない取組 ③学校・家庭・地域の連携	・基礎・基本的な知識、技能を確実に習得させる。 ・家庭学習を充実させ、学習意欲を向上させる。 ・学習への興味関心を高める授業づくりを、学力向上をはかる。	・教科部会で全国学力・学習状況調査の結果を分析、検討し、授業改善に取り組む。 ・兵庫型学習システムを活用し、学力を向上させる。 ・タブレット端末を用いた双方向授業を行い、各教科での授業や課題の工夫をする。	・生徒アンケート、全国学力・学習状況調査において「授業はわかりやすく楽しい」と回答する割合を80%以上にする。 ・生徒アンケートにおいて「先生は、授業内容、テストで分からない問題や間違えた問題をわかるまで教えてくれる」と回答する割合を80%以上にする。	B	・「授業はわかりやすく楽しい」と回答した生徒の割合は、73%と目標を7%下回っている。一方で教職員アンケートにおいて「わかりやすい授業に努めている」と回答した割合が93%になっており、教師と生徒の認識が乖離している。 ・生徒アンケートにおいて「わからない問題や間違えた問題をわかるまで教えてくれる」と回答した生徒の割合は74%と目標値を下回ったが、昨年度より肯定的な回答をする生徒は全体として10%、3年生は20%以上増えた。	・授業のねらいや、指導と評価が生徒にとってわかりやすい授業になっているかを振り返り、授業改善を図る。 ・タブレット端末を中心としたICTを取り入れた授業実践の中で、単元目標達成のために、生徒にとってより効果的なICTの活用がきているかを研究していく必要がある。 ・研究テーマである「主体性や表現力を引き出す授業づくり」をめざし、生徒が主体的に学びたいと思える授業環境を作るための研修と実践を重ねていく。	・授業のねらいを視覚的に明確化しておくことは、授業を通して何度も指し確認もできるため、生徒だけでなく教える側である教員にとっても、非常に重要で効果的であるため、全教員で取り組んでほしい。
		新しい時代に対応した教育の推進 ①情報活用能力の育成 ②英語教育の充実 ③デジタル化の促進	・ICTを効果的に活用する。 ・英語を活用する力を習得させる。 ・連絡をはじめとする情報発信や、意見集約をオンラインで行う。	・インターネットを使って自分で検索したいことを、必要に応じて調べさせる。 ・アプリケーションを効果的に活用させる。 ・専門委員会をはじめとする特別活動で、タブレット端末を活用させる。 ・一人一台端末を活用した新しい学びの実践に取り組む。	・生徒が夢中になって取り組める課題づくりなど、教員のICT活用能力を高める。	・タブレット端末を活用することで、今後必要な力を身につけるための学びを導入することができた。 ・スピーチコンテストや報告会において、タブレット端末を使用したプレゼンテーション能力を養うことができた。	B	・機器の知識を身に付けるために市の研修や、教科の研究発表会に参加することができた。 ・情報について正しく理解し、適切に利用していくための情報モラル教育を推進する。	・情報モラル教育については、道徳教育、サイバー教育などと密接に関連しているため、今後、さらに推進していく必要がある。
		「豊かな心」の育成 ①道徳教育の推進 ②いじめ等の未然防止、早期発見、早期対応に向けての組織的な取組の推進 ③不登校の児童生徒やその保護者への支援体制の充実 ④体験活動等の実施	・豊かな心を育てる道徳教育の充実を図る。 ・いじめの未然防止、早期発見、早期対応に取り組む。 ・カウンセリングマインドを基本とした生徒指導の充実を図り、不登校生徒数を減少させる。 ・体験活動 兄弟学級の取り組みの趣旨について共通理解を図り、南中の伝統を継承し、情操を養う。	・ローテーション授業や授業研究を通して、全教員で道徳教育を推進する。 ・教育相談をはじめ、日常からいじめの早期発見に努める。 ・兄弟学級の取り組みを通じて、異学年交流を行う。	・他者の多様な考えに共感できる、豊かな心を育てる道徳の授業を実践する。 ・「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」の回答を95%以上にする。 ・兄弟学級の取り組みを通して、「行事や授業等において、充実した体験活動になるよう積極的に取り組んでいる」に肯定的に回答する生徒を80%以上にする。	・道徳科の授業づくりについて全教員で研修を行い、ローテーション授業や研究授業を実施することができた。 ・「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」の回答が87.8%であった。前回と比べて大きく目標を下回っていた。 ・兄弟学級の取り組みをはじめとする異学年交流に積極的に参加している生徒がほとんどであったが、下級生の積極性を育成することが今後の課題である。 ・関係機関等と連携し、不登校生徒への支援を行うことができた。	B	・道徳的な課題を一人ひとりの生徒が自分自身の問題と捉え、向き合っていくよう道徳科を要とした道徳教育を推進する。 ・主体的に取り組む生徒がほとんどであったが、下級生がさらに積極的に参加している場面を設定する。 ・個々に応じてさらに関係機関と協力して支援していく。	・実際に身近で起こる可能性がある事例を具体的に取り上げるなど、自覚のない行動が「いじめ」につながっていく可能性があることを、当事者意識を持って考えられるような時間があればよい。
	「健やかな体」の育成 ①児童生徒の体力向上の促進 ②魅力ある部活動の推進 ③発達段階に応じた健全な食育の推進	・自ら進んで体力を向上させようとする生徒を育てる。 ・規則正しい生活習慣と食習慣を身に付け、健康管理能力を育成する。	・体育の授業を通して、体力向上を図るとともに自己の健康面に対する意識を高める指導を行う。 ・授業や行事等を通して、生活習慣や食育の推進を図る。	・新体力テストにおいて、全国平均を7種目以上上回る。 ・生徒アンケートにおいて、「自ら進んで体力づくりに取り組んでいる」項目を、80%以上にする。 ・生徒アンケートにおける「給食は、残さず食べようとしている」項目を80%以上にする。 ・生徒アンケートにおける「保健だよりを通して、食や心身の健康について考えることができています。」項目を80%以上にする。 ・保護者アンケートにおいて、「保健だより等を通して、健康管理の推進に努めている」項目を80%以上にする。	・生徒アンケートにおける「自ら進んで体力づくりに取り組んでいる」項目は70%であり、目標を下回ったが、体力向上プランを作成するなど、達成目標に近づけるよう取り組んだ。 ・生徒アンケートにおける「給食は、残さず食べようとしている」項目は86%と目標を達成することができた。 ・保護者アンケートにおいて、「保健だより等を通して、健康管理の推進に努めている」項目は96%と目標を達成することはできたが、生徒アンケートにおける「保健だよりを通して、食や心身の健康について考えることができています。」項目は56%であった。	B	・PDCAサイクルの確立を通して、体力の向上を実現できるよう取り組んでいる。 ・保健だよりを通して、食生活や心身を振り返り、改善することにより、健康的な心と体づくりを目指していく。	・小学校高学年からの3年間をコロナの影響を受け制限のある学校生活を送った生徒たちであるため、教育力向上については、体力向上についての取り組みを積極的に考えていかなければならない。	
	教育相談・支援体制の充実 ①キャリア教育の推進 ②スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの活用 ③教育相談の充実	・学年に適合したキャリア教育を行う。 ・教育相談やQUを活用し、生徒理解を深める。	・進路学習資料の活用や地域に学ぶ「トライやる・ウィーク」を適切に実施し、主体的に進路に向けて選択する力や態度を育成する。 ・生徒の実態について共通理解し、教員が連携して組織的かつ継続的に指導する体制を整える。 ・教育相談体制をさらに整え、関係機関・SC・SSNとの連携を図る。	・生徒アンケートの「将来の目標や夢を持っている」の肯定的回答を70%以上にする。 ・生徒アンケートの「先生は相談にのってくれる」の肯定的回答を全学年80%以上にする。	・地域に学ぶ「トライやる・ウィーク」の活動を通して、自分の良さや成長を表現しながら、社会の一員である自覚を高めることができた。 ・QUを活用し、学年全体で生徒の実態を把握し、その結果を検討し、課題解決に向けて取り組むことができた。	B	・キャリア・パスポート等を活用し、計画的・継続的なキャリア教育の推進を図る。 ・教育相談体制を整え、教育相談の充実を図る。	・教育相談で、生徒一人ひとりと向かい合う時間を設定できている。 ・日頃から声をかけることで普段と様子が違うことに気づくなど、信頼関係が深まっていればよい。教員のそのようなアプローチが、生徒のアンケート結果に反映されてほしい。	
	特別支援教育の推進 ①伊丹特別支援学校の活性化 ②特別支援教育の充実	・支援体制を整える。 ・特別支援教育の内容を充実させる。	・職員会議、研修会等で、配慮を必要とする生徒の情報を全職員で共有する。 ・教育支援委員会をはじめとする各会議において、個別の指導計画の作成と共有を図る。	・特別支援教育に関する研修会を実施する。 ・全職員が支援を要する生徒についての理解を深めていく。	・個別の指導計画を作成し、具体的な支援内容や校内体制の整備に努めることができた。	B	・個別の指導計画に基づき、学校全体で一人ひとりの生徒を支える体制づくりに努めていく。	・特別支援教育についての知識を深め、蓄積していくことが大切である。その知識がすべてのケースにあてはまるわけではないため、対応の正解が分からないこともあるが、すべての生徒を大切にすることを推進してほしい。	
教職員の資質向上 ①研修等の充実	・授業力向上をはじめとする教職員の資質向上を目指した校内研修会を実施する。 ・校内での教科指導やクラス・部活動経営の実践などを共有し、教職員が互いの資質向上につながる環境作りを努める。(OJT)	・学期に1回の公開授業(表現力スキルアップ月間)を実施する。 ・TTP(教員自主研修)を実施する。 ・夏季研修会の充実を図る。 ・月1回研修会を実施する。	・「教員としての資質向上を意識した職員研修に参加している」に回答する割合を80%以上にする。 ・「教職員は、実践してきた内容をお互いに共有することができている。」に回答する割合を80%以上にする。	・教育課題に対応した校内研修会を実施し、研究と修養に努めることができた。	A	・教職員一人ひとりの資質と学校の教育力を向上させるため、教職員同士の教え合い等のJTの機会をさらに増やしていく。	・教員は、続々と出てくる新しい課題に対応するため、多くの時間を費やしている。そのような中でも、教育力向上のため、教員同士の教え合いや、情報交換をする時間を確保しており、非常に効果的であり大切な時間であると感じている。		
教育環境の整備・充実	学校を支える組織体制の整備 ①コミュニティ・スクールの充実 ②地域と学校の連携・協働体制の構築	・学校運営協議会、学校補導連絡会で地域との連携を図る。 ・地域の行事に積極的に参加する。	・地域住民や保護者と連携、協働し、課題解決に向けて取り組む。 ・学校運営協議会やPTAと連携し、教育活動の活性化を図る。	・学校運営協議会やPTAの支援体制により、教育活動の充実を図ることができた。 ・様々な地域行事や奉仕活動に参画することができたが、生徒の社会参画意識の向上を図る必要がある。	B	・学校運営協議会やPTAとの連携を深め、生徒たちにとって様々な体験活動の機会を設ける。	・コロナの影響を受けた空白の3年間があったが、元に戻すことが正解ではなく、新しい形を作っていくべき。当事者意識を持っていくようなアプローチが必要なのではないか。		
	安全・安心な教育環境の充実 ①学校園防犯訓練・防災教育の充実 ②子どもの安全対策の推進 ③交通安全対策の推進 ④学校園施設の整備・維持保全 ⑤学校における働き方改革の推進	・安全点検を徹底し、安全・安心な学校作りを努める。 ・避難訓練をはじめとする安全意識高揚のための取り組みを計画・実施する。 ・安全衛生委員会において、勤務時間の適正化の推進を図る。 ・教職員の安全意識を高めるための研修を行う。	・危機管理マニュアルを見直し、避難訓練を実施することで、教職員・生徒の安全意識を高め、学校全体で安全教育を行う。 ・記録簿を用いて、勤務時間を客観的に把握する。	・生徒の実態に応じて、避難訓練の方法を見直し、実施することで、実効性のあるものにするのができた。 ・学年定時退勤日の設定とその見える化を図ることができた。	・教職員が円滑かつ的確な対応を図ることができるよう、危機管理マニュアルの毎年検討及び見直しを徹底する。 ・ワークライフバランスの実現に向けて、働きやすい職場づくりを推進する。	B	・安全・安心な教育環境の充実を図るため、危機管理マニュアルを見直し、教職員がしっかりと把握することは非常に大切である。 ・被災した場合は、本校も避難所になることを生徒にもしっかりと意識させなければならない。 ・生徒だけではなく、地震を体験していない教員も増えているため、効果的な避難訓練の実施について、内容をさらに検討してほしい。消防署の協力を得るなどの訓練も、可能であれば実施していくことが必要である。		

**学校関係者評価総括**  
 学校の取り組みは、昨年と同様に大変熱心であり、「先生は授業内容テストでわからない問題や間違えた問題をわかるまで教えてくれる」と回答する生徒は、前年度より10%上昇している。これは、教員が平日頃から生徒一人ひとりに目を配り、心に触れ、声をかけるなど、寄り添う支援をしているからである。この信頼関係の構築が、生徒のアンケート結果に反映されてくることを切に願う。  
 今後も何事においても、前例にとらわれることなく、改善できることがないか常に試行錯誤してほしい。

**次年度に向けた重点的な改善点**  
 ・確かな学力を育成するため、課題の分析・対策を行い、「わかる授業」にしていくための授業研究を行う。  
 その際、生徒側の立場からも考察し、生徒が受け止めきれない容量になっていないか注意してほしい。  
 ・異学年交流(兄弟学級の取り組み)について、下級生に主な役割を担わせ、主体的に取り組ませるなど、積極性や達成感が持てるようにアプローチしていく。